

『高雄第一公学校（旗津国民小学）沿革誌』 植民地期台湾の教育史

Historical Documents of Takao Daichi Common School: A Step for Approaching Educational History of Taiwan in Colonized Period
HURA Saoko

樋浦郷子

【解説】

一、資料紹介の目的と意義

歴史研究全体にとって、紙による文書資料の保存とともにそのデジタル化と共有化が急がれている。こうした状況を前提に本稿は、日本植民地期に作成され、同校で保存されてきた『高雄第一公学校（旗津国民小学）沿革誌』を翻刻、公開し、当該時期の教育の歴史に接近する。公学校とは、台湾植民地化後の一八九七年から一九四一年に国民学校に名称変更するまで存在した台湾人（国語ヲ常用セサル者）を対象とする初等教育機関である⁽¹⁾。

高雄第一公学校の歴史に関しては、新井淑子が植民地期台湾の女性教員の経験に着目し、聞き取り調査にもとづいたビッドな記録の中で取り上げている⁽²⁾。新井の研究から十年以上を経て、当事者へのアンケートやインタビューにもとづき歴史像を描く方法が困難になっている現在、あらためて文書記録の所在確認および保存、公開の必要性が問い直され

ねばならない。同校が百年を超えて管理を行ってきた文書資料群は、植民地であった台湾の一地域から近代学校史を照射するという意味において、日本でひろく公開される価値を持つ。本稿を通じて、同校沿革誌のなかの日本植民地期の部分を翻刻するゆえんである。

はじめに、「学校沿革誌」（以下、一般名詞として使用する場合は学校沿革誌（カッコなし）、とくに高雄第一公学校沿革誌をいう場合は「沿革誌」（カッコあり）とする）に関わる制度について概観する。日本国内の学校で備えるべき表簿を学校備付表簿と呼ぶ。学校備付表簿のうち学籍簿や出席簿は一九〇〇年小学校令施行規則（のち国民学校令施行規則を経て戦後は学校教育法施行規則⁽³⁾）において指定され、対する学校沿革誌はその学校を設置する自治体が区々に定めることになっていた。同じ学校備付表簿といえども、学籍簿と出席簿は大きく全国一律の法律（文部省令）で、学校沿革誌は自治体の責任でという広狭二重のしくみが段階的に構築されてきたといえる。学校沿革誌にかかわる先行研究によれば、地域ごとに細則を設けて学校沿革誌が作成され始めるのは、

一八八〇年代末以降だとい⁽⁴⁾う。

ちょうど日本国内で、学校備付表簿に関するこうした二重の体制が広まり始めたときに、日清戦争を経て台湾では台湾総督府を通じた学務行政が開始された。台湾における学校沿革誌の作成もまた、一八九七年には台南県の県令に確認できるとい⁽⁵⁾う。一八九九年には、「台湾小学校及台湾公学校諸長簿二関スル件」(明治三十二年二月内訓第五十七号)によつて「官公立各学校二備へ置クヘキ諸帳簿」として以下を一九〇〇年一月までに「悉皆整理」することが指示された⁽⁶⁾。

一 生徒学籍簿 二 職員名簿及履歴書 三 学校沿革誌 四 学事二関スル諸規則及公文書類 五 教授細目及教案並教授管理訓練ニ関スル記録 六 生徒賞罰ニ関スル記録 七 生徒卒業及修業証書ノ台帳 八 試験問題及成績表 九 教授用器械図書標本及校具目録 十 統計報告ニ関スル諸表簿 十一 学校日誌 十二 職員出勤簿 十三 生徒出席簿 十四 会計ニ関スル諸帳簿 十五 学校資産ニ関スル書類並記録

学校備付表簿にかかわつては、台湾総督府と台湾各県(または庁)との二重の執行主体により、日本内地で形を作りつつあった段階の法制度が移入されたとみられる。他方一九一一年に「併合」された朝鮮では、学校沿革誌でなく「学校一覧」が朝鮮教育令下の普通学校規程(のち小学校規程、国民学校規程)で義務づけられた⁽⁷⁾。しかし朝鮮に学校沿革誌が存在しないわけではなく、規程に「道知事ノ必要ト認ムル表簿」という項目があり、少なくとも慶尚南道令では学校沿革誌が定められていたことが確認できる⁽⁸⁾。

概ね学籍簿や出席簿は全国的に、沿革誌は地方学務行政に主管されていたことは、台湾も朝鮮も日本国内と共通する。しかし全国(台湾全島、朝鮮全土)をカバーする法制度の部分では、何を作成・保存し、それらをどう呼称するかということに一定の振れ幅があったことを示している⁽⁹⁾。

二、高雄(打狗)と旗津の概要

台湾の南の玄関口である高雄(一九二〇年までは打狗)は清末に開港して人の往来が盛んになりはじめたが、当初は隣接する鳳山街、屏東街に比して「寒村」であった(打狗は街庄制の街ではなかった)。かつて旗後と呼称した旗津は、台湾の南端、高雄湾に突き出た砂嘴である旗津半島の北端に位置する。日清戦争、台湾植民地化後に移住してきた日本人の多くが対岸の陸地である鼓山(哨船頭)、鹽埕埔に居住し、旗後、鼓山(哨船頭)、鹽埕埔の三地区に分かれて市街地域形成が行われた⁽¹⁰⁾。

一九〇〇年代初頭、打狗が台湾を縦貫する鉄道の終点となり、一九二〇年に漢字の地名表記を変更して高雄州が設置され(それまでは台南州打狗)、さらに翌二一年に高雄州のなかの一つの市として高雄市が設置された。北部の基隆と並び立つ要港として築港工事が重ねられ、やがて高雄州庁も屏東街から移転し、砂糖や米、工業生産物を輸移出入する南部の重要港湾へと姿を変えたのが一九二〇年代から三〇年代である。めまぐるしい変転のなかで、高雄は人の移動がとりわけ多い地域という特徴を持つにいたる。浅野セメントや大阪商船など大規模な日本資本が進出し、日本内地ばかりでなく中国本土や朝鮮半島からも移住する人々が多かった。

三、高雄第一公学校の概要と沿革誌

(一) 高雄第一公学校

高雄第一公学校(現在の高雄市旗津区旗津国民小学)は、一八九七年に日本人在住者により設立された国語伝習所にはじまる。翌九八年七月に公布された台湾公学校令にもとづき同年打狗公学校として開校し、高雄への表記変更と市制実施にともない高雄市立高雄第一公学校と改称、一九三七年には高雄市立平和公学校、四一年には高雄市立平和国民学校となる。日本の敗戦後は四五年一〇月に高雄第一国民学校、翌年には旗

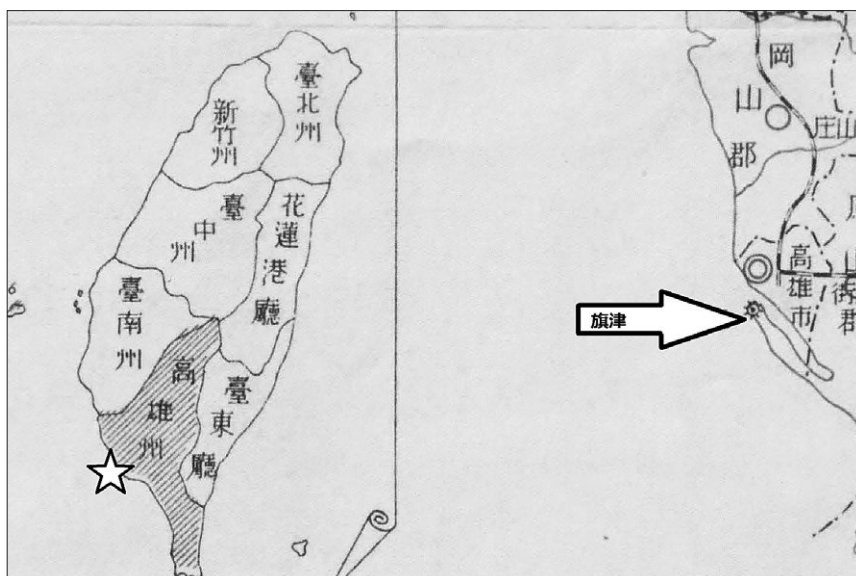


図1 高雄と旗津の位置 出典 『高雄州要覧』台湾日日新報社、1925年。
引用にあたりトリミングし矢印等書き加えた。

津国民学校となり、さらに六八年以降現在まで旗津国民小学という名称になっている。同校は開設当初から一七年間、現在地から約一キロ離れた旗後臨水宮の敷地内に設けられていた。現校地へと移転したのは一九一四年であった。⁽¹⁾

一九九七年には創立百周年記念誌を刊行、二〇二〇年には一二四年目となる。現在同校には校史室が設置され、『公学校唱歌』『公学校用硬筆



写真1 旗津国民小学校舎ピロティ壁面 (2016年8月筆者撮影)。
下段左から職員、卒業生、神社参拝、男女児童の頭髪の様子を写した写真。

書方練習帖』『算術簿』など植民地期に使用された教科書やノート、通知表（他校で使用されたものを含む）の展示があるほか、校内では『学校沿革誌』、『卒業生台帳』、『卒業記念写真帖』、歴代の学校印や卒業証書などが整理、保存され、一階ピロティの壁面には、植民地期からの同校の歴史が写真ボードにして大きく掲示されている（写真参照）。また、高雄市政府教育局の設置した「旗小旧事」と題するホームページでは打

狗公学校の設置認可など、「沿革誌」には見られない開校前の文書が一部公開されている⁽¹²⁾。

右に述べたように、同校はたびたび校名変更を経験してきた。いずれも政治や行政編成上の都合など、学校外の事情に翻弄された同校の歴史を如実に反映させるものである。同校の歴史の中でもっとも長く使用されているのは、現在の校名である旗津国民小学である。植民地期の校名は、はじめは打狗公学校であったが、解放までのあいだでもっとも長期間だったのは旗津第一公学校である。本稿は同校の植民地期の部分を翻刻したものであることにかんがみ、「高雄第一公学校（旗津国民小学）沿革誌」とした⁽¹³⁾。

（二）「沿革誌」の概要

「沿革誌」は、他校同様に編年体、加除式、縦二つ折り式罫紙の綴りである。罫紙は表1に示した各項目のあいだに白葉が数枚綴じこまれ、通し番号が振られており、総計でおよそ二百葉から成る。光復後も同一の簿冊に部分的ではあるが近年まで書き継がれた。本稿では原則として一九四五年までを翻刻した⁽¹⁴⁾。原本に付された通し番号に従えば表1のような構成となっている。

「沿革誌」上でははじめに「目次」が記されているが、目次のタイトル・項目と実際の頁に記載されたそれらとは内容が異なっている場合がある。表1は実際に記載されたタイトルに拠った。また、「沿革誌」目次上では最後に「衛生」と項目立てがなされているが、実際には綴じられていない。以前あったものが除かれたのか、はじめから記載されなかったのかは不明である。

四、「沿革誌」から歴史を読む

（一）近代教育機関としての展開

表1 「沿革誌」の構成

12-15	創立当時ノ事情
15 左 -62 右	沿革
110-111	歴代校長
112-123 右	職員
123-125 右	歴代教導主任（光復後）
135-137	学級及児童
138-141 右	光復後【学級及児童】
145-148 右	入学及退学児童
165-169	卒業生
180	校地校舎及付属建物
181-183	校舎及付属建物
185	職員宿舎及付属建物

打狗公学校から高雄第一公学校、平和公学校などと改称しつつ規模が大きくなっただけではない。表2に示すように、その分校、分教場が周辺地域の学校として独立することとなった。

のちの旗津国民小学となる打狗公学校は、一九二二年には簡易商業学校⁽¹⁵⁾と高雄第二幼稚園を併置、一九三八年までに四校の公学校が同校の分教場等から分離独立し公学校（国民学校を経て国民小学）となった。このように近代教育機関が地域に展開する母体としての役割を果たしたことも、同校の特徴といえる⁽¹⁶⁾。

（二）児童の入退学―女児、外国籍児童―

「沿革誌」には、「貧富ノ懸隔甚シク住民ノ大部分ハ水上ニ生活スル漁夫ナリ」と記される⁽¹⁷⁾。創立から一〇年以上は児童の確保がままならなかった。さらに一九〇七年以降は「年間一円二〇銭ノ授業料」を徴収されることになり、児童の確保はなお困難になった⁽¹⁸⁾。同校に初めて女児が入学したのは同じ一九〇七年であるが年度内には三二名の女児在学者が「全減」した。女児を入学させるために学校は保護者との「約束」により女

表2 打狗公学校の展開

西暦	1897	1904	1907	1920	1921	1924	1931	1936	1937	1938	1939	1941
本校	打狗公学校開校			高雄第一公学校に改称					平和公学校に改称			平和国民学校に改称
分校		通学区改編で苓雅寮分校を所管	苓雅寮公学校として独立		高雄第二公学校と改称				青葉公学校に改称			青葉国民学校に改称
分離教室				舊城公學校から内陸分離教室を移管	第三公学校開校で同校分教場として移管	清水公学校として独立			（桃子園分教場を設置）		（桃子園分教場を廃止）	清水国民学校に改称
分教場					中洲分教場設置					中洲公学校として独立		中洲国民学校に改称
簡易実業補習学校					簡易商業補習学校設置							
幼稚園					第二幼稚園設置							
国語講習所							旗後国語講習所設置					
高等科								高等科設置				

性教員を雇用したが、年度末にその教員を解雇した。入学にあたって「勧誘」と「自然入学」という表現が本沿革誌では用いられている。「自然入学」で女兒が入学するのは、一九二一年に至ってのことであった。

しかし、初の女兒「自然入学」が一九二一年であることは、珍しいケースではない。打狗公学校を所管した当時の台南庁の女兒の公学校就学率は、一九一四年で一・六パーセント（男女合わせて六・三パーセント）、三年後の一九一七年で二・〇パーセント（男女合わせて八・八パーセント）であった⁽¹⁹⁾。また、外国人児童の在籍数について、「沿革誌」の一九二九（昭和四）年から一九四〇（昭和一五）年まで男女別の数と総計が記載されている点に関心を引く。⁽²⁰⁾ 外国人の在学のうち総計を摘出してみれば、表3のようになる。一九三七（昭和十二）年から三八年の一年間で、急激な「外国人」児童の大きな変動、とくに三七年から翌年にかけて二〇名減少したとされる点に注目したい。

表3、4から、日中戦争の本格化により中華民国籍の人々が対岸へと引き揚げ、それにもなつて公学校の外国人児童数も一九三七年から翌年にかけて二〇名の減少があったことがうかがわれる。また、四〇年代になると朝鮮籍民が激増したことがわかる。⁽²¹⁾ 「外国人」児童を析出し集計する行為、およびその数の変遷は、「帝国日本」内の位置づけや戦況にともなう人の移動を間接的に反映するものといえる。

（三）校長、教員

「沿革誌」の「歴代校長」「職員」の項目によれば、公学校時代の台湾人教員や卒業生が光復後の混乱期に学校を支える人材として戻る事例がみられる。光復後初代校長として着任したのは林守盤訓導であった。その後林のあとを継いだ蔡榮森もまた、一九三三年から四四年にかけて訓導を務めた。校長以外にも、副校長・教頭に該当する教務（教導）主任を務めた人物もみられる。例えば蔡嘉興は、一九一九年から二年間同

表4 高雄市における全人口と朝鮮籍民、中華民国籍民の人口

	全人口 (人) A	Aのうち 朝鮮籍	Aのうち 中華民国籍
1927年	50,351	20	1,210
1934年	81,582	81	1,995
1935年	86,848	98	2,428
1936年	94,017	112	2,941
1937年	101,173	165	2,004
1943年	215,145	445	2,221

『台湾常住戸口統計』(台湾総督府官房調査課、各年版)、
『台湾戸口統計』(台湾総督府、各年版)をもとに作成

表3 「沿革誌」記載の外国人児童数

西暦	元号	外国人 児童(人)
1929年	昭和4	34
1930年	昭和5	24
1931年	昭和6	26
1932年	昭和7	27
1933年	昭和8	29
1934年	昭和9	23
1935年	昭和10	23
1936年	昭和11	37
1937年	昭和12	45
1938年	昭和13	25
1939年	昭和14	34
1940年	昭和15	40

校訓導を務めたあと、長老教中学校⁽²²⁾教員になるために一度退職したが、別の公学校教員として復帰したのち一九四九年から三年間教導主任となった。同校卒業生で林守盤の教え子だった張自流⁽²³⁾も教務主任を務めた。

(四) 紀元二千六百年、空襲、強制疎開

「沿革誌」の「沿革」項目は、一九四〇(昭和十五)年が詳細で注目される。同年の「紀元二六〇〇年」関連の記事は次のように記載されている(摘記)。

二月十一日 紀元節莊重ニ舉行 二六〇〇年頌歌ヲ歌フ
六月十九日 高雄神社ニテ舉行サレタル紀元二千六百年奉祝銃后奉公大会ニ參列
十月十三日 日独伊三国同盟祝賀旗行列市主催ノ下ニ舉行サレ四年以上参加
十一月十日 紀元二千六百年記念式宮城前苑ニテ天皇皇后両陛下御出臨ノ上ニ開催セラル、コノ盛典ニ本校長參列セラル 学校ニテハ記念式典ヲ舉行シ引続キ築港神社前ニテ奉公班ト共ニ式典ヲ行ヒ 万歳三唱、旗行列ヲナス

同じ頁の記録からは、これらの祝賀行事と並行して、同年三月には教員宿舎が火災に遭い、九月には台風で一部教室が倒壊するなど大きな災害に次々見舞われていたことも判明する。

一九四三年に海軍警備府が高雄に移転し、一帯が空襲にさらされた。一九四五年二月には強制疎開を命じられたこと、同年九月三日には疎開地から帰った教員と学生で授業を再開したことが注目される。

「沿革誌」にはまだまだ多くの史実が含まれている。まずは整理、公開し、研究者の今後の利用のための一助としたい。



【翻刻】『高雄第一公学校（旗津国民小学）沿革誌』

【凡例】

- (一) 『打狗公学校（高雄第一公学校、高雄市平和国民学校、高雄第一国民学校、旗津国民小学）沿革誌』を本稿では「沿革誌」と略記する。
- (二) 右上の数字は原本に振られている通し番号である。
- (三) 人名を除き、旧字体、異体字は新字体で表記する。
- (四) 判読不能箇所は文字数分の空白を□で記す。
- (五) 文章が削除、訂正されている場合、削除、訂正される前の語を「」内に記載する。
- (六) 翻刻部分での本稿執筆者（樋浦）による注記は「」内に記す。

2										1
順序										順序
201 185 165	145 125 112 110 15	12	頁数							頁数
卒業生 校地及校舎 学校衛生	入学及退学児 学級及児童 職員 歴代校長 沿革一般 又其後ノ概況 創立当時ノ概況	項目	沿革ノ一般事項 職員 校長 職員 学級 児童 入学退学 卒業 校地校舎 其ノ他職員宿舍等 寄付金品							項目
		摘要	創立当時ノ事情、 設立区域、授業料、							摘要

12 創立当時ノ事情

曾テ打狗在住ノ内地人ニテ組織セル打狗倶楽部
ナルモノアリテ国家ノタメ有利ノ事業ヲ起コサムト俱
楽部ノ寄付金ヲ以テ国語普及ヲ図ルコトナリ
打狗国語伝習所ヲ設立シ旗後街臨水廟ヲ
校舎ニ充テ生徒十四名ヲ集ム。 仍テ
鳳山国語伝習所教諭橋本勝伸派遣教授ヲ
ナスニ次シ明治三十年六月十四日開校式ヲ挙行
シタリ。

数ヶ月ヲ経テ倶楽部員ニ異動ヲ生シ寄付金
モ亦豊ナラズ 本島人モ「亦」之ヲ翼賛スルモノナク
橋本教諭自ラ資ヲ投ジテ其ノ一部ヲ補ヒタリ。
全三十一年二月初メテ本島人林璣璋以下ノ寄
付金アリ 生徒モ漸ク増加シテ三十六名トナレリ。
同三十一年七月台湾公学校令発布セラレ此ノ
組織ヲ改メ三十一年十月一日打狗公学校ヲ
組織ヲ改メ三十一年十月一日打狗公学校ヲ

13 創立ス。

創立以來学事微々トシテ振ハズ当局ニ於テハ或ハ
児童ニ或ハ父兄ニ直接間接ニ種々ノ奨励勧誘ニ努
メタルモ其ノ効現ハレズ 即土民未タ公学校ノ効果ヲ
觀察スルノ明ナク国語ノ必要ヲ覺ルモ極一部人民ノ
ノミナリ。 加フルニ内外ノ船舶出入シ交通盛ニシテ人情輕
薄風格奢侈ニシテ貧富ノ懸隔甚シク住民ノ大部
ハ水上ニ生活スル漁夫ナリ。 更ニ不便トスル所ハ通学区
域ノ分離散在セルコトナリ。 隔海ノ児童ハ極メテ学事
ニ熱心ナルモノ、外ハ入学セズ。 為メニ本校児童ノ通学

区域ハ唯七百戸ヲ有スル旗後街ノミノ状態ナレバ
ナリ。（明治三十九年末）

従来男子ニ於テサヘ十分ノ効ヲ奏セザリシカバ女子ノ

如キハ未ダ募集ノ機ナカリシモ明治四十年度ニ於テ

遂ニ三十二名ノ女生ヲ募集スルヲ得タリ。然ル

ニ此ノ年ヨリ年額一円二十銭ノ授業料ヲ徴収セラル

14
、コト、ナリ 加フルニ打狗ノ発展ト共ニ家庭内副業大ニ「加」

起リタルタメ女子ノ出席日々ニ減少シ遂ニ年度末ニ至リテハ漸

ク数名ヲ数フルニ至レリ。如斯状態ニテ最初父兄トノ間ニ

約束シタル女教員モ解雇セザルベカラザル情態トナリ独立教室

ヲモ女子ノタメニ与フルコト能ハズ遂ニ本年度限り再ビ影ヲ失フニ
至レリ。（明治四十年度末）

打狗港ノ繁栄ハ糖米ノ移出ニ由リシモノナリ。然ルニ近来此

等ハ内地ノ豪商ニ帰シ本島商人ハ手ヲ拱スルニ至レリ。

故ニ商業ハ付近集落ノ間ニ於ケル日用品取引ノミニテ実ニ

微々タルモノナリ。大部分漁民ニシテ就学者少ナク 半途退

学生モ多クハ雇人トナルモノナリ。卒業生ノ如キ卒業後進デ

上級学校ニ入ルモノ稀ニシテ富家ノ子弟ニシテ内地ニ留学スルモノ稀ニアリ。（明治四十二年度）

社会ノ進運ニ伴ヒ向学心漸ク高マリ本年度ハ四学級

満員トナルニ至レリ。曾テ勧誘ノ結果漸ク女生徒ヲ得テ遂

ニ全減ノ非運ニ遇ヒタルガ本年ハ自然入学トシテ十七名ノ女児ヲ得

向学心益々発展シ本年度ヨリ新入学児童ニハ毎年学用品代ヲ

前納セシ「モ」ムルモ尚入学志願者収容児童数ヲ超過スルニ至レリ。

【青字で和暦と民国歴との対照表】

15 沿革	年 月 日	事項
	明治三十年六月十四日	打狗在住内地人ノ組織セル打狗倶楽部 ニテ寄付金ヲ集メ臨水宮（燈台山麓ニ アル廟宇、昭和十一年築港作業工事ノタメ取 毀サル）ヲ仮校舎トシテ国語学校ヲ開設 ス（大正二年ニ至ル十五ケ年ノ間仮校舎ニ充ツ）
	明治三十一年十月一日	明治三十一年七月台湾公学校令発布セラレ
	〱公学校正式成立ス	陳中和氏外三十一名ヲ得テ打狗国語伝習所ノ後ヲ承 ケテ打狗公学校トシテ創立ス。
		此ノ時ノ設立区域
		大竹下里ノ内 旗後街、塩埕庄、中州庄
		興隆内里ノ内 哨船頭街 塩埕埔庄
		（打狗区全部ナリ）
		初代校長教諭橋本勝伸任命サル
	明治三十二年二月	台南県知事本校ヲ視察ス
	明治三十三年十月十日	教育ニ関スル勅語謄本下賜サル
	明治三十六年三月三十一日	第一回卒業生ヲ出ス
	明治三十七年一月十五日	大竹里荅雅寮区ヲ本校設置区域ニ編 入ス
	明治三十七年四月一日	荅雅寮分校ヲ置ク
	明治三十九年八月	近藤森校長依願免本官
		頂林子邊公学校（現林園公学校）長齋藤
		牧次郎本校長ヲ命セラル
	明治四十年四月	勧誘ニ依リ女子三十二名ヲ入学セシメタルモ

退学者相踵キ年度中竟ニ全減トナル
荅雅寮分校 荅雅寮公学校トナル

荅雅寮区分割ス

明治四十年四月一日
祝氏政長本校ヲ視察奨学金貳拾円

ヲ寄贈セラル

17 明治四十二年四月一日
公学校規則改正修業年限ハ八箇年トナル

明治四十四年四月
始メテ自然入学トシテ十七名ノ女児ヲ得

明治四十四年四月十二日
限本学務部長本校ヲ視察セラル

【青字で加筆】

註1明治時代至四十五年 月改年號為大正一年

2大正一年為中華民國元年

【加筆部分終了】

大正二年四月一日
公学校規則改正修業年限六箇年トナル

向学心益々發展シ本年度ヨリ新遊学児童ニ学

用品ヲ前納セシムルモ尚志願者収容児童数

ヲ超過スルニ至レリ

本年度末ニ至リ他ヨリ千円ノ借入金ヲナシ工費

六千六百七十円ニテ平和町一番地ノ二十八・四教室

及便所宿直室ヲ新築ス

大正三年四月一日
右校舍及附属建物落成シ十五年間余リノ

仮校舍臨水宮ヨリ此処ニ移転ス。

大正四年四月一日
小川視学官本校ヲ視察ス

本年度ニ於テ木造平屋建瓦葺二十坪ノ校

長宿舍落成 臨水宮廟内ヨリ移転ス。

大正五年九月
大石視学官本校ヲ視察ス

木造平屋建二教室及事務室落成ス

18 大正七年十二月
平野視学官本校ヲ視察ス

大正八年五月

大正九年九月一日

大正九年度

太田視学官本校ヲ視察ス

地方制度改正セラレ区域變更ニヨリ旧

域公学校内惟分離教室 本校分離教室トナル

平家^マ建煉瓦造三教室及便所（北側）

木造物置、日覆体操場ノ建築成ル

（煉瓦造三階建ノ教室ハ 学事ニ尽力スルモノ多ク

官庁其他何等ノ後援モナク二萬円ノ寄付金ヲ募集

シ之ニ依リ 増築スルコト、ナリタル由。）

大正十年三月

大正十年四月一日

同日

同日

大正十年七月一日

小野視学官本校ヲ視察ス

校名ヲ高雄第一公学校ト改称ス

中洲分教場ヲ設置ス

高雄簡易商業補習学校ヲ併置ス

高雄第三公学校新設ニヨリ内惟分教

場ヲ同校区域ニ編入シ塩埕町山下

町方面ノ児童ヲ同校ヘ転学セシム

高雄第二幼稚園ヲ併置ス

大正六年十二月私立打狗幼稚園トシテ設立臨水

宮内ニ開園セラレタルモンアルガ地方制度改正

ニ伴ヒ公立高雄第二幼稚園トナリタルモノナリ。

木造堀建平屋二教室建築

中洲分教場煉瓦玉石混造瓦葺平家

二教室及便所建築

皇太子殿下当地行啓ニ際シ本校第六学年一学級高雄第一尋常高等小学校

ニ於テ台覽授業ノ光栄ヲ擔フ

齊藤牧次郎校長病氣ノタメ依願免

本官トナリ後任トシテ潮州郡視学秋山

芳太郎本校校長ヲ命セラル

19

大正十年十二月

大正十年十二月

大正十二年四月二十一日

大正十二年十月九日

大正十三年六月

煉瓦造亜鉛板葺平家二教室及廊下
建築（北側校舎）

大正十三年十一月

煉瓦造亜鉛板葺平家一教室建築
（南側校舎）

大正十三年十一月十二日

木造平家造瓦葺職員宿舍乙号二戸住一棟
丙号二戸住一棟新築（北校舎）

大正十四年五月十九日

秋山芳太郎校長病氣（腸チフス）ノタメ
死亡

大正十四年七月八日

鳳山郡視学萩本満重本校長ニ補セ
ラル

20 昭和三年七月十六日

職員宿舍木造平家建瓦葺二戸住
二棟新築（中宿舎）

昭和三年十月

本校創立三十周年記念トシテ左ノ事業
ヲ行フ

記念式

追悼式

祝賀運動会

植林

昭和四年二月八日

昭和四年八月

職員宿舍丁号四戸住一棟新築
全島少年野球大会（台北）ニ本校選手出
場優勝ス 戦蹟次ノ如シ

八月三日 一公3―新竹1 八月四日 一公3―台南0

八月五日 一公16―台中0

21 昭和五年八月

全島少年野球大会 本校選手出場ス
（台北） 戦蹟次ノ如シ 惜クモ優勝ヲ他ニ譲ル

八月二日 一公3―台南4 一公0―台北4

八月三日 一公3―台中3 八月四日 一公3―台東8

22

昭和六年四月十三日

旗後国語講習所開設サル

昭和九年三月二十三日

南側教室二教室煉瓦造平家建瓦葺増築
南側便所十坪増築

昭和九年三月三十一日

中央主運動場約一千百坪ノ地上ゲヲナシ
(盛土ニヨル) 前面七十五間ノ石垣(北門) 及煉瓦塀
ヲ築造ス
此ニ依リ旧来ノ校舎ヨリ一段低キ校庭ト道路
ト校地ノ境界 面目ヲ一新スルコト、ナル

昭和九年四月二十八日

本校児童保護者会設立サレ創立総会開催サル。

昭和九年十月十日

高津青年団結団サル

昭和十年四月一日

高雄商工専修学校ノ設立ニ伴ヒ本校併
置ノ商業補習学校ハ同校内ニ移転サル

(高雄第一小学校内)

昭和十年七月十三日

萩本満校長依頼本官ヲ免ゼラレ元

屏東郡視学兼属 丸山 糸(当時高

雄州教育課勤務社会教育事務嘱託)

本校長ヲ命セラル

昭和十年十二月二日

新校舎二階建鉄筋煉瓦々葺校舎及校長宿

舎改築ノ工事ヲ起ス

昭和十年十二月六日

高津女子青年団結成サル

昭和十年三月二十五日

校長宿舎改築工事竣ル(建坪二十五坪檜造面目一新ス)

昭和十一年四月一日

高等科ヲ併置セラレ四月十一日一学年入学式
ヲ挙行ス

23

右ハ昭和十年四月商業補習学校本校ヨリ移転シタ

ル結果之ニ代ルヘキ機関トシテ当地保護者等当局ニ設
置方ヲ希望シタルモノガ漸ク容セラレタルモノナリ。

24

昭和十二年四月一日
昭和十二年八月三日

昭和十二年三月三十一日

昭和十一年十二月十七日

昭和十一年十月十一日

昭和十一年夏休中

昭和十一年六月十四日

昭和十一年五月二十六日

昭和十一年四月二十九日

昭和十一年四月二十六日

昭和十一年四月三日

昭和十一年四月三十日

但シ学級ニ非常ニ無理ヲ生ズルコトニナリ中洲分教場一学級増ヲ表向高等科ニ充ツル^マテシタメ補助教員二名ノ中一名ヲ中洲勤務本校ハ高等科ノ教員ハ配置サレザルコト、シテ辛^マ乏スルコト、ナル
新築二階建校舎四教室及階段一ヶ所落成ス。

校長宿舎改築落成五月六日引越ス。

本年度初メヨリ教室竣工マデ教室不足ノ為五学年及六学年ニ一部二部教授ヲ行フ。

尚山下金作訓導短期現役中（四月一日―八月三十一日）三学年全部ヲ三学級二教員ノ交互二部教授ヲ行フ。

高津少年団高雄神社ニ於テ結団式挙行サル。

当女子青年団々旗樹立式ヲ行フ。

天長節式後男女青年代總會ヲ行フ。

歴代校長写真揭示。

市内小公学校児童野球ニ優勝旗ヲ獲得

職員児童粘土採集作業ヲナス

体育大会ヲ校庭ニテ催ス

校庭裏山排砂作業ヲ始ム。相当搬出セルモ完成セズ。バケツニテ児童搬出ニ日々当タレリ。

丸山校長高雄州社会教育主事ニ補セラレ

後任ニ東港公学校長三谷節本校長ニ補セラル

高雄第一公学校ヲ高雄平和公学校ト改称ス。

高雄市教護連盟本日堀江小学校ニテ発会式

挙行セラル 本校之ニ加盟ス

昭和十三年四月十四日

三谷校長高雄州視学ニ任ゼラレ後任ニ屏東
市大宮公学校校長赤星勝次郎本校長ニ
補セラル

昭和十三年三月三十一日

中洲分教場独立四月一日ヨリ中洲公学校トナリ
同分教場勤務職員同校勤務トナル
四月二十九日開校式挙行サル。

昭和十三年六月十日

新校舎煉瓦及鉄筋コンクリート混造二階建ヲ
更ニ四教室新建ス

昭和十三年七月三十日

従来卒業生ノ希望者ノミヲ以テ組織セラル本男
女青年団ハ州訓令ニ基キ二十五才以下ノ全卒業
生ヲ以テ之ニ充ツルコト、ナリ其ノ拡充強化ヲ図リ
本日午後八時ヨリ入団改組ヲ行ヒ名モ平和青
年団及平和女子青年団ト改メ盛大ナル式
ヲ挙行ス

昭和十三年九月十日

尚七月三十一日市連合青年団強化報告祭高雄神
社ニテ挙行サレ引続キ湊小学校講堂ニテ強化
宣誓式行ハル。
ヨリ州下全青年団鳳山飛行場建設作業ニ当ルコト
トナリ本団モ団員二十六名宛数日交代ニテ之ニ従
事スルコト、ナリ各班指導者ニ引率サレ真剣ニ其
ノ作業（本市ハ排水溝掘リ中条公学校ニ宿営）ヲ
行ヒ十月末日マデ官僚

25 昭和十三年十月

開校四十周年記念行事

本年開校四十周年ニ相当スルヲ以テ学校
及保護者合同ノ上左記行事ヲ行フ

開校四十周年記念奉告祭

皇運武運長久祈願祭ヲ高雄神社ニテ挙

十日	行 港町渡船場四年以上男女児童青年団員 保護者有志二千余名集合市内行進ノ後以 上ノ行事ヲ行ヒ ツイデ西子湾グランドニテ 三、視閲及分列式ヲ行ヒ市尹代理水溜助役ノ視閲 四、校旗樹立式 高雄神社ニテ奉告祭 校庭ニテ宣誓式
十五日	五、遺家族慰安学芸会 築港第二クラブニテ通学区内出征応召軍人家族 ヲ招待シテ児童団員学芸会ヲ開キ茶菓御食応 記念ニ 皇后陛下御歌短冊南師□先生書ヲ贈ル 物故職員児童卒業生慰霊祭 校庭ニテ神式ニヨリ举行
十六日	七、開校四十周年記念式 知事代理州教育課長、市尹、市内中等学校長小公 学校長、旧職員、父兄有志等多数参加 現旧職員ニ記念品贈呈 八、祝賀会 九、記念学芸大会 事務室前校庭ニ舞台ヲ 作り小雨降ル中ヲモ厭ハズ決行観客数千 成績上々
十一月六日	十、屏東陸軍病院慰問 職員児童女子青年団員六十人舞踊及劇（当時西子湾病院ナシ） 昭和十四年月二十二日青少年学徒ニ賜リタル勅語 ノ謄本本日市役所会議室ニテ御下賜相成リ 学校長奉戴シテ帰り奉安ス 翌十五日奉戴式ヲ 举行ス
26 昭和十四年九月十四日	
昭和十四年九月一日	毎月一日ヲ以テ興亜奉公日卜定メラル（全国）

昭和十四年十月十五日

本校モ項目ヲ定メテ九月一日ヨリ奉公ニ務ム
本年ヨリ男女青年団ノ合同体育会ヲ築港
グラウンドニテ分団別對抗陸上競技会ヲ開ク
尚国語講習所モ合同ス

昭和十四年十月二十二日

学校幼稚園合同体育会ヲ開催ス
場所同前グラウンドニテ行フ

昭和十四年十月三十日

高二張自流州知事ヨリ優良児トシテ表彰サル
通学区各区ニ国語常用連盟支部結成サレ本

昭和十五年二月

校長其ノ結成幹旋ヲナシ本校ニテ結成式挙行サル。
紀元二千六百年紀元節莊重ニ挙行二千六百年

昭和十五年二月十一日

頌歌ヲ歌フ。

昭和十五年三月三十一日

正午校長宿舍東隣四戸一棟ノ端ナル川口甲
虎生訓導宅ヨリ出火四戸共天井裏等ヲ焼カ
ル 隣ノ山下金作、三浦定雄、林守盤訓導持物

相当厄災ヲ被リタルモ誠ニ相済マヌコトヲナシタリ。
州下教職員、父兄、卒業生児童ヨリ救恤金ノ寄贈

等アリ。出火原因不明、又起訴ニ至ラザリキ。

昭和十五年四月五日

職員児童節米励行ノ趣旨協力ノタメ弁当ヲ総テ
代用食トスルコトニナリ約二ヶ月ノ後之ヲ解ク。

27
昭和十五年六月十九日

高雄神社ニテ挙行サレタル紀元二千六百年奉祝銃后
奉公大会ニ参列

昭和十五年九月三十日

因ニコノ日檀原神宮前ニテ全国大会開催セラレタリ
前夜来ノ台風ノ為トタン葺仮教室二室一棟、三十周年記念
水揚ポンプ室一棟、幼稚園木造仮教室一棟倒壊

モ怪我人ナシ

昭和十五年十月一日

国勢調査施行 赤星校長監督委員ニ神、林

藤田訓導調査委員トナル

昭和十五年十月六日

十月二十七日

紀元二千六百年奉祝体育会開催十月六日ハ青年国語講習所合同 十月二十七日ハ学校幼稚園合同ニテ開催盛況。二千六百年記念奉祝ノタメ保護社会ヨリ児童ノ為ニ優勝旗授与（新調）青年団ノタメ有志ヨリ優勝杯ノ寄贈アリ。

昭和十五年十月十三日

大政翼賛日独伊三国同盟祝賀旗行列市主催ノ下ニ挙行サレ四年以上参加

昭和十五年十月二十六日

高雄市平和町旗後町奉公班結成サル

昭和十五年十一月十日

紀元二千六百年記念式宮城前苑ニテ天皇皇后両陛下御出臨ノ上ニ開催セラル、コノ盛典ニ本校長参列セラル

学校ニテハ記念式典ヲ挙行シ引続キ築港神社前ニテ奉公班ト共ニ式典ヲ行ヒ 万歳三唱、旗行列ヲナス。

コノ日本校長及林訓導表彰サル。

昭和十五年十一月十一日

前同様祝典アリ。赤星校長参列

石井訓導市主催奉祝宴ニ出席ス。

コノ夜旗後平和町奉公班提灯行列ヲ行フ。

28 昭和十五年十二月五日

故西園寺公望公（十一月二十四日死去）国葬ニ付遙弔式

昭和十五年十二月十九日

九月三十日倒壊ノボンブ室保護者会ニテ再興其他

大破ノ屋根モ大部修善サル

昭和十六年四月一日

高雄市平和公学校ヲ高雄市平和国民学校ト改メラル。

昭和十六年十二月八日

太平洋戦争勃発ス

昭和十九年四月

高雄方面ヨリ登校スル学生ヲ以テ双葉国民学校成立ス戦争熾烈トナリ空襲日増シ激烈トナリ旗後一体ノ民衆

昭和二十年二月

昭和二十年八月十五日

昭和二十年九月三日

光復後

民國三十四年十二月一日

民國三十五年三月

民國三十五年五月

民國三十六年七月

民國三十六年九月

民國三十七年十月

民國三十五年九月一日

民國四十年三月一日

民國四十年八月十五日

民國三十七年十月

民國三十五年七月

民國四十三年八月

民國四十五年九月

強制疎開ヲ命ゼラレ、本校モ亦寿国民学校ニ疎開ス

日本帝国同盟国ニ対シテ無条件降伏ヲ申出ル

本校教員張自流疎開地ヨリ帰り日本人 教師ヲ指揮シ

本校ノ重要書類ヲ疎開先ヨリ運びカエル。同時ニ

カエレル学生ヲ集メテ授業ヲ開始ス

林守盤先生接長本校校長

校名暫稱為高雄市立第一国民学校

旧制高等科廃止（停辦）

創設市立第一初級中学

市立一中迁出與市立四中合併成立新市立一中

林守盤校長調任三民國校校長遺缺代蔡榮霖先生

接充

举行五十周年校慶

奉令將校名改為高雄市旗津區旗津國民学校

校長蔡榮霖先生請辭照准代雷可南接任

校長雷可南改調任市立女子中学教員代趙憲之接充

本校少年棒球參加比賽得冠軍（優勝）

光復校舍及宿舍大修理完竣

趙憲之校長調長楠梓國校馮雅谷接第五

任校長

馮雅谷校長調長右昌國校遺缺泯本校教導主任張自流

接充（光復後第五任校長）

歴代校長

官職名	資格	氏名	生年月日	任命年月日	退職年月日	勤続年月	族籍	備考
第一代	公学校甲種教諭	橋本勝伸	慶応三年二月	明治三十一年十月		二年	熊本県士族	鳳山公学校校長ニ転任ス
第二代	公学校教諭小学校々	近藤 森	明治四年五月	明治三十三年二月二日	明治三十九年八月	六年七月	茨城県士族	依願本官ヲ免セラル
第三代	公学校教諭	齊藤牧次郎	明治九年三月二十 九日	明治三十九年八月	大正十二年十月九日	十七年三月	岡山県士族	依願免本官
第四代	公学校甲本 正	秋山芳太郎	明治十九年一月 十六日	大正十二年十月十一日	大正十四年五月十九 日	一年八月	群馬県平民	死亡
第五代	公学校甲本 正	萩本満重	明治十七年八月七 日	大正十四年七月八日		十年一月	福岡県平民	鳳山郡視学ヨリ依願免 本官
第六代	公学校甲本 正	丸山 系		昭和十年七月十三日	昭和十二年三月 三十一日	一年九 〔四〕ヶ月	長野県平民	州社会教育主事
第七代	公学校甲本 正	三谷 節	明治二十八年十二 月二十四日	昭和十二年三月三十一日	昭和十三年四月十四 日	一年	広島県平民	東港公学校校長ヨリ 州 視学ニ
第八代	公学校甲本 正	赤星勝次郎	明治二十六年一月 十五日	昭和十三年四月十四日			熊本県平民	屏東大宮公学校校長ヨリ 岡山農業専修学校校長ニ 死亡
第九代	公学校甲本 正	横山農夫志	明治二十八年五月 二日	昭和十六年六月三日	昭和十八年八月 三十一日	二年三ヶ月	高知県	屏東市視学ヨリ 依願 免本官
第十代	公学校甲本 正							

112										113									
校長	〃	〃	職員	官職名	資格	氏名	生年月日	任命年月日	退転年月日	勤続年月	族籍	備考	教諭	教諭	教諭	教諭	教諭	教諭	教諭
則松信人					(秀才)	呉 汝【さん ずいに専】	嘉永二年二月八日	明治三十二年一月十七日	明治三十三年十一月二十日	一年十月	本島人	依願解雇 埤仔頭庄長	小公 教諭	小公 教諭	公 教諭	公 教諭	公 教諭	公 教諭	小公 教諭
林 守盤					公 教諭	岡村多聞	明治九年一月二十九日	明治三十二年三月二十五日	明治三十四年十月一日	二年四月	熊本県平民	阿蘇公学校へ転出	酒匂七之助	酒匂七之助	横張常次郎	久場里忠	蔡氏富楼	王 超英	村山一郎
					(秀才)	胡 秀峯	安政五年七月二十五日	明治三十三年十一月十五日	明治三十五年十一月三日	二年十月	本島人	死亡	元始元年二月二十日	元始元年二月二十日	〃	〃	〃	〃	〃
					公 教諭	山口次郎作	明治元年十月十五日	明治三十四年七月十日	明治三十五年七月二十三日	一年	静岡県平民	楠梓坑公学校へ転出ス	吉川榮三	吉川榮三	〃	〃	〃	〃	〃
						許翰 郷	文久三年十二月	明治三十五年三月	大正六年十二月二十一日	十六年三月	本島人	依願解雇							
					公 教諭	河原壽夫	明治五年二月十八日	明治三十五年七月二十五日	明治三十六年十一月二十二日	一年六月	北海道平民	阿公店公学校ニ転出ス							
					(廩生)	胡 子程	明治三年八月二十六日	明治三十六年一月十日	明治三十七年四月十七日	一年四月	本島人	依願解雇							
					公 訓導	曾 計士	明治十六年十一月十二日	明治三十六年七月「六」月二十五日	明治四十年八月二十九日	四年三月	本島人	荅雅寮公学校へ転出ス							
					公 教諭	佐藤與五平	明治元年十二月	明治三十七年十一月二十九日	明治三十七年三月三十一日	三月	群馬県平民	布袋公長ヨリ 休職							
					教務囑託	村山一郎	明治四年十二月	明治三十七年十月	明治四十年五月	二年八月	山形県士族	解職							
						王 超英	明治二十四年十一月三日	明治四十年五月二十九日	明治四十三年一月十二日	二年九月	本島人	依願解雇 渡清							
						蔡氏富楼	明治八年九月九日	明治四十年五月三十一日	明治四十年十一月三十一日	八ヶ月	本島人	依願解雇							
					公 教諭	久場里忠	〃 十一年四月五日	明治四十年八月三十日	明治四十年十一月	四月	沖縄県士族	依願解雇							
					公 教諭	横張常次郎	〃 六年九月五日	明治四十年一月二十一日	明治四十一年四月	四月	広島県平民	依願解雇							
					公 教諭	酒匂七之助	明治十三年十二月二十日	〃 四十二年四月八日	明治四十二年十二月二十一日	九月	鹿児島県士族	員林公学校ニ転出							
					小公 教諭	元始元年二月二十五日	四十二年五月	明治四十二年四月二十日	明治四十三年四月二十日	一年一月	長崎県平民	蕃署寮公小ヨリ 大湖公学校へ転出							

[illegible]

教諭心得	欧清石	明治三十一年十一月十五日	大正十年五月十四日	大正十一年三月三十一日	八月	沖繩県土族	御用済ニツキ免職【解雇】
准訓導	乙准教		大正十年三月三十一日	大正十三年五月十三日	二年二月		第二幼稚園保母へ
嘱託		吳朱氏笑 永井哲一	明治三十五年一月十五日 明治二十二年十月八日	大正十四年三月三十一日 大正十年五月十日	一年 八月	高雄州 大阪府平民	依願本官ヲ免ス 御用済解雇
教諭心得		蔡戴氏月	明治三十三年八月十日	大正十年三月三十一日	二年	高雄州	依願本職免ス
教諭	公乙教諭	李源興	明治三十四年二月十八日	大正十「一」年三月三十一日	一年	台南州	依願本「職ヲ免ス」官免【マヌ】
教諭	公甲教諭	石上金治	明治二十四年二月十八日	大正十年四月二十八日	三月	群馬県平民	東石港公ヨリ 高雄三公へ
訓導心得		曾氏翠霞	明治三十八年九月十八日	大正九年五月七日	一年三月	高雄州	高雄三公へ
教諭心得		赤澤ヤエ子	明治三十四年三月十二日	大正十年六月二十八日	九ヶ月	大阪府平民	依願本職ヲ免ス
訓導	公甲本正	野田春吉	明治二十九年十二月七日	大正十一年三月三十一日	六年	佐賀県平民	湖西公ヨリ 恒春第一公へ
訓導	公甲訓導	屋嘉喜代	明治二十八年四月十一日	大正十一年四月十八日	十一月	沖縄県土族	第三公へ
訓導	公甲本正	小倉房二	明治二十四年四月二十六日	大正十二年三月三十一日	六月	茨城県平民	台北師範訓導ヨリ 台南師範教諭へ
訓導	公甲本正	藤本堅	明治三十二年十二月二十日	大正十二年三月三十一日	一年	兵庫県平民	鳳山公ヨリ 楠梓公へ
訓導	公甲本正	田中修	明治三十六年三月三日	大正十二年三月三十一日	一年	愛媛県平民	楠梓第二公へ
訓導	公乙本正	安藤定泰	明治二十九年一月二日	大正十二年三月三十一日		宮崎県土族	
(教員心得) 訓導	公甲本正 小本正	堤松市	明治三十五年三月二十三日	大正十四年四月九日	大正十五年六月三十一日	佐賀県平民	高雄一小へ
教・心	公乙本正	玉木平次郎	明治五年十一月二十三日	大正十二年十二月十五日	大正十五年三月三十一日	和歌山県平民	依願本職ヲ免ス
訓導	乙本正	坂本三男	明治三十七年十一月二十四日	大正十四年三月三十一日	大正十五年五月十五日	長崎県土族	長浜公へ
教・心		依田一郎	明治四十年七月十日	大正十四年五月四日	大正十五年	福島県土族	依願本職ヲ免ス
訓導	乙「丙」本正	鄭蔡氏連籍	明治三十五年三月四日	大正十一年三月三十一日	昭和二年三月二十五日	高雄州	々
訓導	甲本正	南元彦	明治三十七年七月九日	大正十三年三月三十一日	昭和二年七月十九日	京都府平民	依願免本官

118										117									
訓導	訓導	訓導	教心	官職	訓導	訓導	訓導	商補助教諭	教心(訓導)	訓導	訓導	訓導	教心	訓導心得	教心	教・心	教・心	教・心	教・心
甲本正	甲本正	甲本正		資格	乙本正	乙本正	甲本正		乙本正	乙本正	乙本正	乙本正	公甲本正 小々	乙本正	坂本 貢	小豆澤幸子	呉 石桂	松垣 茂	島崎作郎
村田芳子	山下 豈	内田研二	丸山伸子	氏名	張 煥德	鐘 阿欽	宮野定雄	松久正喜	石川 英	諸富文子	鳥崎作郎	諸富文子	本名賢雄	洪 清藝	坂本 貢	小豆澤幸子	呉 石桂	松垣 茂	島崎作郎
大正五年一月二十三日	明治三十五年一月十日	明治三十九年三月二十五日	明治四十二年二月十八日	生年月日	明治四十二年二月十五日	明治三十九年四月二十一日	明治三十五年六月二十一日	明治三十九年六月十三日	明治四十二年四月二十一日	明治三十八年三月二十一日	明治三十二年二月二十六日	明治三十八年三月二十一日	明治三十九年一月一日	明治三十七年三月八日	明治四十二年二月十一日	明治四十二年三月二十日	明治三十五年七月十四日	明治三十八年二月十六日	明治三十二年二月二十六日
昭和八年三月三十一日	昭和五年三月三十一日	昭和四年三月三十一日	昭和七年四月二十三日	任命年月日	昭和三年三月三十一日	昭和四年十一月十七日	昭和三年九月六日	昭和四年十一月九日	昭和四年十一月九日	大正十一年四月六日	昭和三年三月三十一日	昭和三年四月三十九日	大正十五年二月十五日	昭和二年十二月十七日	大正十五年三月三十一日	昭和二年六月三日	大正九年四月二十六日	大正十三年三月三十一日	昭和三年三月三十一日
昭和十年三月三十一日	昭和九年三月三十一日	昭和八年八月二十六日	昭和八年三月三十一日	転退年月日	昭和八年三月三十一日	昭和八年三月三十一日	昭和七年八月三十一日	昭和七年三月三十一日	昭和七年三月三十一日	昭和五年三月三十一日	昭和五年三月三十一日	昭和五年三月三十一日	昭和三年九月六日		昭和四年八月二十六日	昭和四年九月二十一日	昭和四年九月二十一日	昭和五年三月三十一日	昭和五年三月三十一日
二年	四年	四年五月	一年	勤務年数	五年	四年三月	四年	二年五月	七年十一月	二年	二年	一年十一月	九月		二年三月	一年	五年六月	一年十一月	二年
石川県平民	鹿児島県平民	佐賀県士族	長野県平民	族籍	高松州	新竹州	新潟県平民	岐阜県平民	沖縄県平民	福岡県平民	〃	大分県平民	沖縄県士族	福島県平民	熊本県平民	島根県平民	高松州	高松州	大分県平民
職	昭和九年五月九日ヨリ 休職(病)新店公へ復職	屏東公ヨリ 屏東公へ	高雄第一幼稚園へ 東港公ヨリ 新園公校 長へ	備考	恒春第二公へ	屏東公ヨリ 長浜公へ	旗山第一公ヨリ 新園 公鳥龍分へ	依願免本官	依願免本官	依願免本官	旗山第一公ヨリ 湖内 第二公へ	昭和四年四月一日北師研究 科へ入学 屏東公学校へ 旗山第一公ヨリ 湖内 第二公へ	〃	高雄一小ヨリ 高雄一小へ	高雄三公へ	高雄三公へ	荅雅寮公へ	昭和四年四月一日北師研究 科へ入学 屏東公学校へ 旗山第一公ヨリ 湖内 第二公へ	依願本職ヲ免ス

119

訓導	乙本正	鐘 泉源	明治三十九年二月十七日	大正十五年三月三十一日	昭和十年九月三十日	九年六月	高雄州	依願免本官
訓導	乙本正	住田豊義	大正二年三月十五日	昭和八年九月一日	昭和十年十一月二十五日	二年三月	鹿児島県平民	病死
訓導	甲本正	吉田秀夫	明治四十年一月十五日	昭和二年三月三十一日	昭和十一年三月三十一日	九年	茨城県平民	内惟公へ
		鷹司幸枝	大正三年六月一日	昭和十年四月九日	昭和十一年三月三十一日	一年	鹿児島県平民	瀧川公ヨリ 高雄第一小へ
		野村 秀	明治三十四年十一月五日	昭和五年三月三十一日	昭和十三年三月三十一日	八年	鹿児島県士族	湖内第二公ヨリ 旗山第一公へ
		伊坂亭乃助	明治四十三年一月十一日	昭和六年□月三十日	昭和十一年八月三十一日	七年	東京府士族	新任 新東勢公
		尾山充雄	明治三十五年九月十二日	昭和九年三月三十一日	昭和十一年八月三十一日	二年五ヶ月	熊本県	
		前田ヨシ子	大正六年二月十三日	昭和十二年四月二十日	昭和十三年三月三十一日	一年	熊本県平民	社皮公学校長 仕隆公学校
		古堅宗光	明治三十七年十二月二十日	昭和十一年三月三十一日	昭和十三年四月一日	二年	沖縄県士族	
		葉 綜祺	大正二年二月二十七日	昭和十一年二月二十日	昭和十二年十二月二十七日	二年	澎湖庁	
		中村謙三	大正四年七月二十二日	昭和十二年九月三十日	昭和十三年十一月二十八日	四年	栃木県平民	
		藤本東子	明治二十二年四月二十二日	昭和十年五月七日	昭和十三年六月五日	三年	山口県	
訓導	乙本正	宮崎壽子	明治三十九年六月二十日	昭和二年三月三十一日	昭和十三年三月三十一日	十年半	熊本県平民	高三公ヨリ 休職後免
訓導	甲本正	吉田隆太郎	明治四十二年十月二十日	昭和十三年三月三十一日	昭和十四年二月六日	一年	奈良県	依願免
市雇（衛星）	乙本正	谷山 綾	大正元年十一月十七日	昭和十二年七月十日	昭和十四年一月二十二日	二年	鹿児島「缺」士族	湊小へ
訓導	乙本正	網島操子	大正元年十一月四日	昭和七年四月十四日	昭和十四年三月三十一日	七年	岡山県平民	初メ教心 依願免
教心	西 正一		大正三年五月四日	昭和十三年四月十二日	昭和十四年三月三十一日	一年	千葉県平民	□任 依願免
市雇「教心」 （事務員）	乙本正	村山拡子	大正十年一月一日	昭和十三年四月八日	昭和十四年三月三十一日	一年	宮城県平民	依願
訓導	乙本正	飯盛ソル子	明治四十四年九月二十五日	昭和十一年三月三十一日	昭和十四年九月六日	三年半	福岡県平民	初教心 依願免
訓導	甲本正	成富徳治	明治三十八年五月二十二日	昭和十二年三月三十一日	昭和十五年四月一日	三年	佐賀県平民	南師訓導 屏東師範附公
		湯川 清		昭和九年五月	昭和十三年三月	四年		
訓導	乙本正	櫻谷貫之（人 田ト改姓）	明治三十八年三月四日	大正十五「四」年三月三十一日	昭和十五年四月一日	十四年	兵庫県	甲仙公ヨリ 千歳公へ

訓導	甲本正	神野義照	明治三十八年三月二十七日	昭和十三年九月末日	16年3月	愛媛県	
訓導	甲本正	上野三次	明治四十五年三月二十一日	昭和十二年九月末日		熊本県	(死亡)
訓導	甲本正	山下金作	大正四年十一月十七日	昭和十一年三月三十一日	19年3月	右同	新任
訓導	甲本正	三浦定雄	大正六年六月二十九日	右同	16年3月	鹿児島県	□□□小学校
訓導	甲本正	星久重	大正七年一月二十一日	昭和十二年三月三十一日	昭和十九年三月	宮城県	新任
訓導	甲本正	前田忠義	大正二年十月一日	昭和十四年四月四日	19年3月	香川県	
訓導	甲本正	勝呂秀雄	大正八年十一月二日	昭和十三年三月三十一日	19年3月	静岡県	新任
訓導	甲本正	森静子	大正九年十月十二日	昭和十四年三月三十一日	15年3月	熊本県	〃
訓導	甲本正	松井モモヨ	明治三十九年八月三十日	昭和十一年十二月二十七日	16年3月	福岡県	
訓導	乙本正	何江都	大正十年九月二十四日	昭和十四年三月三十一日	17年3月	台北州	新任
訓導	乙本正	大塚登恵	明治四十四年六月二十四日	昭和十四年九月三十日	16年3月	福岡県	
訓導	甲本正	藤田重治	明治四十四年十二月二十五日	昭和十五年四月三十日	16年3月	滋賀県	
教心	乙本正	竹内傳吉	明治四十年八月二十五日	昭和十五年六月十日	18年3月	三重県	
教心	甲本正	山下とき	大正四年一月十二日	昭和十五年三月三十一日	19年3月	広島県	
教心	乙准訓	庭月野清香	大正十年十二月二十日	昭和十五年三月三十一日	二十年八月	鹿(児)島県	
教心	甲准訓	海老名貞枝	大正八年四月二十三日	昭和十五年三月三十一日	17年3月	山形県	鳳山公ヨリ
市雇(事務員)	李氏聰敏	大正十一年十月二十一日	昭和十五年三月三十一日	民國(37?)		高雄州	
市雇(衛生婦)	高山小百合	明治四十一年九月二十一日	昭和十一年三月十六日	十八、三		千葉県	
教心	甲本正	前田忠彦	昭和十五年四月	昭和十七年三月		鹿児島県	
教心	乙本正	松岡敏美	大正三年九月十五日	昭和十五年十二月二十日	17年3月	広島県	

123

職別	資格	歴代教導主任（光復後）	出生年月日	任命年月日	退職年月日	服務期間	籍貫	備考
教導主任	北師畢業	楊植芳	民國34年12月	民國34年12月	34年12月	半月	福建	調任市府秘書
〃	南師演習科	蔡榮霖	35年11月	35年11月	36年8月	十月	台南市	改任旗山教員
〃	北師畢業	陳意	35年10月	35年11月	35年11月	二月	澎湖縣	調任塩埕國校校長
		又吉盛一	18、4、1					
		益田〇〇						
		陳其芻	19、4		19、10			
		新田貞夫	17年4月		18年3月			
		平野	17年4月		19「8」年3月	✓		
		（片山壽）	18年4月		20、8	✓		
		林芳雄	18年4月		19年3月	✓		
		王阿錢	18年4月		民40年3月	✓		
		顏烏隆	18年4月		19年3月	✓		
	✓	潘綉鄉	17年4月		20年8月	✓		
	✓	蔡雪霞	17年4月		民國36年	✓		
	✓	李世武	17年4月		民國40年8月	✓		
		扇原勝郎	16年4月		19年3月	✓	富山縣	
		佐々木豊偉	16年4月		20年8月	✓		
		橋口勉	16年4月		20年8月	✓		
		田中善彦	16年4月		20年8月	✓		

〃	北師演習科	許青雲	36年9月	37年2月	半年	澎湖縣	改任水產教員
〃	廈門私立雙十中學	方聖恩	37年3月	38年9月	一年七個月	福建	調塩埕國校教員
〃	台北國語學校	蔡嘉興	38年9月	41年8月	三年	高雄市	退休後轉任屏東縣山地國校長
〃	國校教員檢定合格	張自流	13年12月9日 41年9月	45年8月31日	四年	澎湖縣	調新興國校教導
〃	南師旧制本科	蔡鳳鳴	14年3月19日 45年9月1	50年8月28日	五年	高雄市	調中洲國校校長
〃	屏師	黃朝欽	17年5月5日 50年8月29	53年8月	三年	高雄市	調建國國小教導
〃	台中師範特師	張鵬翼	11年 53年8月1	57年9月	四年	瀋陽市(遼寧)	調任忠孝國小教導
〃	中師	許六富	16年 57年8月1	63年9月	六年	高雄市	改任春山國小教務
教務主任	南師	許亨通	26年□月5日 63年9月	65年8月1日		澎湖縣	
〃		鄭英一	65年8月1	67年8月1日	二年		
訓導主任		蔡義枝	66年8月1	67年8月1日	一年		

136										135	
大正九年	大正八年	大正七年	大正六年	大正五年	大正四年	大正三年	大正二年	大正元年	年度	年度	学級及児童
一 二	九	八	六	五	五	五	四	四	学級数	学級数	
五 〇 七	三 四 九	三 三 九	二 九 〇	二 七 三	二 四 五	二 二 六	二 二 二	二 〇 二	男	男	
一 二 〇	一 〇 五	八 一	六 二	五 五	四 四	六 二	三 六	三 五	女	女	児童数
六 二 七	四 五 四	四 一 〇	三 五 二	三 二 八	二 八 九	二 八 八	二 五 八	二 三 七	計	計	備考

137

大正十年	一	四四九	一一一	五六〇
大正十一年	一二	五一八	一四五	六六三
大正十二年	一四	五九三	一六九	七六二
大正十三年	一四	五五七	一五一	七〇八
大正十四年	一四	五六八	一七五	七四三
昭和元年	一四	五九六	二〇二	七九八
昭和二年	一五	六〇二	二一一	八一四
昭和三年	一六	六一七	二三三	八五〇
昭和四年	一六	六七三	二六六	九三九
昭和五年	一六	六九五	三〇六	一、〇〇一
昭和六年	一七	七五四	三二七	一、〇八一
昭和七年	一八	七九三	三四四	一、一三七
昭和八年	一八	八〇九	三七四	一、一八三
昭和九年	一九	七八二	三八九	一、一七一
昭和十年	一九	八五二	四五二	一、三〇四
昭和十一年	二一	九四五	四八一	一、四二六
昭和十二年	二三	一、〇二一	五四八	一、五七九
昭和十三年	二五	一、〇七三	五九九	一、六七二
昭和十四年	二七	一、一七七〔五六七九〕	七七	一、八五六〔五
昭和十五年	三〇	〇五六〔六六〕	七一二	七一二
昭和十六年	三〇	一、三二八〔九八一二〕	七九	二、一三二
昭和十七年	三二	四六	二、〇九〇	二、〇九〇
昭和十八年	三五			
昭和十九年	三五			

再記 外国人男二五
女九三

〃一九 五二四
〃二一 五二六
〃二二 五二七
〃二一 八二九
〃一五 八二三
〃一六 七二三
〃二五 一二三七
〃三一 一四四五
〃一六 九二五
〃二一 一三三四
〃二四 一六四〇

【以下略】

光復後	學級	男	女	計	
三十四年度上学期	一四			四五八	
三十四年度下学期	一四	四四一	二七九	七二〇	
三十五年 上学期	一六	五四五 八一	二六三 八一	八八三	
三十五年 下学期	一六	五四三	三三三	八七六	
三十六學年上学期	一八	五五六	三七七	九三三	
三十六學年下学期	一八	五二四	三三五	八五九	
三十七學年上学期	二一	六〇八	四一七	一〇二五	
三十七學年下学期	二一	六一三	四二八	一〇四一	
三十八學年上学期	二三	六四二	四五〇	一〇九二	
三十八學年下学期	二三	六五一	四七五	一一二六	
三十九學年上学期	二六	九〇五	四九九	一二〇四	
三十九學年下学期	二五	七一八	五五三	一二五一	
四〇學年第一学期	二九	七五〇	五五一	一三〇一	内合二班民教班
四〇學年第二学期					
四一年度第一学期					
四一年度第二学期					

145

入学及退学児童

明治三〇		明治三一		明治三二		明治三三		明治三四		明治三五		明治三六		明治三七		明治三八		明治三九		明治四〇		明治四一		年度
女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	
	四一		六六		四九		二九		三三		四一		三八		五一		四二		四六		四		三六	新入
																								再入
																								転入
	四一		六六		四九		二九		三三		四一		三八		五一		四二		四六		四		三六	計
																								転退
	三〇		五二		二七		二八		二四		四一		五〇		四		四九		四四		四		一	退学
																								死亡
	三〇		五二		二七		二八		二四		四一		五〇		四		四九		四四		四		一	計

																146									
																年度	昭和四三		昭和四二						
昭和九		昭和八		昭和七		昭和六		昭和五		昭和四		昭和三		昭和二		大正元	昭和四四								
女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男				
四〇		八六		二九		一二〇		一五		五六		一二		五〇		九	五二		一三						
																	六		六五						
																	五一		一七						
																	四〇		新入						
																								再入	
																								転入	
五		九		一〇		二〇				七		一		五			五								
四		五		九		三		一		六		三		五		計	四		七						
五																									
四		三						二		二		三						転退							
一		三		一		三		五		四		九		一		二		三		事故退					
七		三		〇		五		四		二		三		四		二		六		三					
																				死亡					
二																									
一		三		三		五		四		九		四		一		五		一		計					
七		九		一		三		五		九		四		四		一		七		三					

147										1										
〃五		〃四		〃三		昭和 二		〃一五		【欄外】	〃一四		〃一三		〃一二		〃一一		〃一〇	
女	男	女	男	女	男	女	男	女	男		女	男	女	男	女	男	女	男	女	男
七一	一四三	六六 (二)	一三一 (八)	五四 (三)	一一九 (八)	四五	一二〇	五三 (二)	一〇四 (六)	新入	四五	九七		一三五	二二五	四三	一〇〇	五三	二〇一	
一	二二八 (二)	・	三三三 (三)	二	四	・	五	・	・	再入	五	二		三	七	四	四	九	一二	
九	・	七	一五六 (八)	一六七 (三)	二五	一〇	二五	五	二三	転入	五	一九		二三	五五	一一	一九	二九	五六	
八一	一七三 (二)	七三 (二)	一五六 (八)	一六七 (三)	一四八 (八)	五五	一五〇	五八 (二)	一二七 (六)	計	五五	一一八		一六一	二八七	五八	一二三	五六	二六八	
五	二〇二七 (二)	六一二 (二)	一七 (二)二三 (六)	七	一〇	六	一七	七	一八三六 (二)	転退	五	一二		二三	【五五】 六二	二三	三	五六	二三二 五九【五】	
一五	・	・	・	一	三〇	(二七)二八	(三八)四一	一〇	・	「家」事故	一五	二三		二六	三六	一五	五一	五四	・	
一	三五〇 (二)	一八 (二)	二四二 (八)	・	一	【二】	□	一	二五六 (二)	死亡	・	・		・	二	・	・	・	・	
二一	・	・	・	一八	四一	三四	五八	一八	・	計	二〇	三五		五七	九五	一七	五三	八〇	二八一	

本科	〃 二	高等科	〃 二	本科	〃 二	高等科	〃 二	〃 一	〃 〇	〃 九	〃 八	〃 七	〃 六			
男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男
二〇三	一九	(一九)四〇	一一三	一八〇	・	六二〔四〕	一〇四	一六六	二二八	一八三	六二(一)	七四(三)	一四四	六三(二)	一三〇	一三六
八	・	・	三	八	・	・	一六	二六	一	三	一	二(一)	一	・	一	四
四九	・	一	二二	五四	・	二	二	一	二〇	二四(朝)	一三七	一九(一)	三〇	一三七	三〇	四七
二六〇	一九	一四(一)	一三八	二四二	・	六四	一四三	一九三	一四九	二三八(朝)	一五六	九五(四)	一七五	一七六	一六一	一八七
五三〔上 七〕	二	上八六一	二九(一)	四八(一)	・	・	一九	三七	二二(一)	三八	一九	九	二六	一八	一五	一八(一)
一四	七	一四	一五(五)	(二)一六	・	・	五	九	一七	二一	五(二)	二二	一九	一四	二五(二)	二五(一)
・	・	・	・	二	・	・	一	二	一	三	一	一	一	・	二	三
六七	九	二二	(六)四四	六六(一)	・	・	二五	四八	(二)四〇	六一	四二	二九	一五六(三)	三三	二四(二)	三四(一)

148

【以下余白】

〃 一四	高等 科	〃 一四	本 科	(欄外)	〃 一三	高等 科	〃 一三
女	男	女	男		女	男	女
九	六九 (一)	一四 (五)	二一 (五)	新入	一二	五三 (二)	一三 (五)
・	・	・	一 六〇 (三)	再入	・	・	・
・	一 七〇 (二)	二六 (五)	二七 (八)	転入	・	二 五八 (二)	二三 (一)
九	・	一 七〇 (二)	二七 (八)	計	一二	二 五八 (二)	一五 八
一	上 八 二四	二七	三三 (二)	転退	一	上 八 七	一八
・	九	六	七	事故	三	七	八
・	・	一	一	死亡	・	・	・
一	三 五	三 四	二 四 (一)	計	四	一 四	二 六

167				
回数	昭和六年	男	女	計
三〇	昭和六年	八七	三四	一二一
三一	昭和七年	一一七	三五	一五二
三二	昭和八年	一二〇	三七	一五七
三三	昭和九年	一〇六	五〇	一五六
三四	昭和一〇年	一二二	五五	一七七
三五	昭和一一一	一二一	六〇	一八一
三六	昭和一二二	一二二	五四	一七五
(高一)	高等科五〇	七	五〇	
三七	昭和一三年	一四五	六七	二二二
(高二)		二六	七	三三
三八	昭和一四年	一二二	五八	一八〇
(高三)		四〇	一〇	五〇
三九	昭和一五年	一七四	一〇八	二八二
(高四)		四七	五	五二
四〇	昭和一六年	一五〇	九一	二四一
(高五)		五三	四	五七
四一	昭和一七年	一九六	一〇五	
(高六)		四六	三	
四二	昭和一八年	一二二	一三九	

二四	大正一四年	七一	一四	八五
二五	昭和元年	九〇	一九	一〇九
二六	昭和二年	七三	二二	九五
二七	昭和三年	八二	二八	一一〇
二八	昭和四年	九〇	二一	一一一
二九	昭和五年	八三	三八	一二一

180

計	(高七)		(高八)	
	昭和一 九年	四三	四三	四三
三 一 七 八	七 四	五 四	四 六	一 四
一 一 三 二	四 七	六		
四、四〇〇				

校地及校舎並附属建物

明治二十一年創立当初ヨリ大正二年度末マデ約一五ヶ年ノ間燈台山麓臨水宮ヲ仮校舎ニ充当ス。

職員宿舎モ同宮内ニ造作ヲ施シ【空白】戸ヲ構ヘ

大正二年度ニ至リ他ヨリ二千円ノ借入金ヲナシ工費六千六百七千円ニテ平和町【空白】ニ地ヲ相シ四教室又便所宿直室ヲ新築ス

大正四年度ニ至リ校長宿舎ヲ新築シ臨水宮ヨリ移転ス

大正六年度ニ於テ二教室及事務室ヲ増築ス。

大正九年度ニ於テ平屋建煉瓦造三教室及便所物置、日覆体操场ノ建築成ル。

以上ノ建築物ヲ表示スレバ次ノ如シ

爾後ノ変動ニ就キテハ説明ヲ略シ表示スルコト
ス。

181				
校舍及附属建物				
種別	建物種類	建坪	価格	竣工年月日
○ 教室	木造土居葺平家飯二教室	五二、〇〇	二、〇〇〇、〇〇	大正十年二月 一教室□壞光復後修理 一教室瓦葺
昭和十三年 腐蝕倒壊× 日覆体操場	木造吹板屋根土居葺平家	七〇、〇〇	三、〇一〇、〇〇	〃
○ 物置	〃 一棟 廊下共	二三、七五	四、七五〇、〇〇	〃
○ 便所	木造瓦葺煉瓦造平家建一棟			
教室	煉瓦建瓦葺平家三教室	八三、五	一七、六五七、五〇	大正一二年一月一三日引継交市役所 大正九年度
事務室	一室			
教室	〃 二教室	一〇〇〈坪〉、二五	六、九〇六〈円〉、八〇	大正六年度
○ 便所 宿直室兼小使室	〃 一棟	一二〈坪〉、五	一六、六七〇	〃
教室	木造瓦葺煉瓦造平家建四教室	一三〇〈坪〉、〇	(小使室七二〇)	大正二年三月 □壞

中洲	教室及便所	教室	教室	教室
煉瓦□石混合造瓦葺平家 二教室 一棟	煉瓦及鉄筋コンクリート混 造	二課建階段共、四教室	右同	二階建 四教室
六〇、七三	一六二〈坪〉、五四			一四〇〈坪〉、〇三
四、一八五、〇〇	二三、六〇七〈円〉、 〇〇			二二、四八五、九四
大正十年十二月	昭和十一〈民國二五〉年四月十六日			昭和十三〈民國二七〉年六月十日
				昭和十六〈民國三十〉年八月七日
				昭和十七〈民國三一〉年九月四日
				大正十四年十一月

185

職員宿舍及建物		種別	建物種類	数量	価格	竣工年月日
校長宿舍	枝長	〔宿舍〕	〔木造平家瓦葺〕	〔二〇〇坪、二三〕	〔一、八六五円〕	大正四年度 昭和十一年三月二十五日改築【赤字】
	宿舍		〓 丁号四戸住一棟	四〇、〇〇	四、九〇〇	昭和四年二月八日
	宿舍		〓 乙号二戸住一棟	五四、二五	四、九四一	大正十三年十一月十二日
	宿舍		〓 丙号二戸住一棟			
	宿舍		〓 二戸住一棟	六〇、〇〇	七〇、七〇	昭和三年七月十六日
校長宿舍			〓	二五、〇〇	二、九一七（円）、 二五	昭和十一年三月二十五日改築
			煉瓦塀モルタル塗裏木戸附 門 レンガ造人造石塗木扉 附	二三間五 一基	三七六円 四五円	〓
			竹垣 柱形丸太竹垣レンガ 造土留附	一二間	九〇円	〓
			袖垣 竹垣木扉附	七間五	三九円	〓
			日覆 竹庇	四間	一八円	〓

註

- (1) 一八九八年台湾公学校令(同年勅令第一七八号)、一九一九年第一次台湾教育令(同年勅令第一号)、同二年第二次台湾教育令(同年勅令第二〇号)に基づき台湾総督に規定された諸規則を通じて就学年数、教科などが定められた。なお第二次台湾教育令では台湾人ではなく「国語ヲ常用セサル者」を教育の対象と位置づけた。少数だが公学校に在学する日本人、小学校(「国語ヲ常用スル者」対象校)に在学する台湾人も存在した。「義務教育」ではなく、授業料が徴収された。先住民の居住する特別行政区には、異なる簡易なカリキュラムの公学校分教場や教育所が設置された。
- (2) 新井淑子「植民地台湾における戦時下の玉川国民学校と平和国民学校の実態」『埼玉大学紀要』五六巻二号、埼玉大学教育学部、二〇〇七年。
- (3) 小学校令施行規則(一九〇〇年八月二十一日、文部省令一四号)第八九条で学籍簿、第九〇条で出席簿の編製が求められるようになり、一九四一年国民学校令施行規則でも引き継がれた。現行の学校教育法施行規則では第二十八条において職員の名簿、出勤簿、指導要録などを備えるよう定められている。
- (4) 永田三男「はしがき」『藤沢市教育史』史料編第六巻、藤沢市教育委員会、二〇〇〇年、はしがき(長田三男執筆、頁表記なし)。柏木敦「更級郡庄内尋常小学校」について『研究資料』二三三二号、二〇一一年三月、頁四。なおこれらの先行研究では学校備付表簿の一つとして作成される学校沿革誌のほか、周年記念誌などもひろく「学校沿革史(誌)」として把握し、柏木は広義の「学校沿革史(誌)」の一領域として備付表簿として編年体で記載されるものを位置付けている。本稿の対象には、周年記念誌類は含まず、狭義の(学校備付表簿としての)学校沿革誌に限定する。
- (5) 台湾の学校で備えるべきとされた表簿についての詳細は北村ほか「『新化公学校沿革誌』『新化実業補習学校沿革誌』—植民地台湾の教育史」(『北海道大学大学院教育学研究紀要』一二六号、北海道大学、二〇一六年四月)二二三頁。
- (6) 「台湾小学校及公学校諸帳簿二関スル件」(一八九九年十二月 内訓第五十七号)、台湾教育会編纂「台湾学事法規 完」、帝国地方行政学会、一九二九年改訂版(『日本植民地教育政策史料集成(台湾篇)』(第二三巻、龍溪書舎、二〇〇七年)所収)。
- (7) 大正十一年二月朝鮮総督府令第八号、普通学校規程、一九二二年、第六九条。普通学校ニ於テハ左の表簿を備フヘシ
一日誌、日課表、教授細目、学校一覽表、教科用図書配当表、校地校舎の図面(中略) 五 前各号ノ外道知事ノ必要ト認ムル表簿
- (8) 昭和十三年十二月一日道令二九号、小学校規程施行規則第一五条第一項。
- (9) 朝鮮では大韓帝国政府から朝鮮総督府に移管した段階ですでに存在していた初等学校(「併合」後は普通学校と呼称した)が複数あり、それらが学校沿革誌をまとめるということは大韓帝国期の学校の歴史を叙述することになるため、朝鮮総督府が民族ナショナリズムへの接近を避けようとして「沿革」よりも「覧」が案出された可能性が考えられる。
- (10) 藤井康子「わが町にも学校を」、九州大学出版会、二〇一八年、第三章「高雄街の成立と中等学校誘致」。同書「コラム1 高雄中学校入学の思い出」には、高雄第一公学校から高雄中学校に進学した卒業生の回想が紹介されており興味深い。小学校卒業生に混じって公学校から受験することがどれほどの困難であったかということを示している。
- (11) 「千円ノ借入金ヲナシ工費六千六百七十円ニテ平和町一番地ノ二十八二四教室及便所宿直室ヲ新築ス」(『沿革誌』通し番号17頁)。
- (12) 高雄市政府教育局「旗小旧事 学校沿革 日治時期文献」http://affairs.kh.edu.tw/499/album/album_list/31?cat=7 二〇一九年二月二〇日最終閲覧。
- (13) 新井淑子は前掲論文(注2)で「平和国民学校」の名称をタイトルの中で使用している。インタビューが主であり、話し手が国民学校期の経験者である点にかんがみれば適切だと思われる。なお同論文二二頁で「打猫公学校」と記載されているが「打狗公学校」の誤りである。
- (14) 卒業生が校長として着任したなど、連続性が注目される場合は例外的に一九四五年以降も翻刻した。
- (15) 大正八年四月、台湾公立簡易実業学校官制(勅令第七〇号、一九一九年)および台湾公立簡易実業学校規則(府令第四八号)による。修業期間は最長で二年。
- (16) このような特徴は、台南の新化公学校(現在の彰化国民小学)にもみられる。両校は国語伝習所から始まったことも共通している。
- (17) 「沿革誌」、通し番号13頁。
- (18) 同右。
- (19) 「台湾総督府学事第十二年年報(大正二年)」(台湾総督府民政部学務部、一九一七年)「台湾総督府学事第十五年年報(大正五年)」(台湾総督府民政部学務部、一九一八年)掲載の統計を用いて計算した。なお、弘谷・広川が同じ学事年報統計をもとに台湾全体の就学率を算出しているが、これに比すれば台南州は二(三)パーセント低い(弘谷多喜夫・広川淑子「日本統治下の台湾・朝鮮における植民地教育政策の比較的研究」『北海道大学教育学部紀要』二二二号、一九七三年十一月)。
- (20) 「沿革誌」、通し番号137頁。
- (21) 四〇年代になると、台北市よりも港湾都市である北部の基隆市、南部の高雄市が朝鮮籍人口の一位、二位を占めるようになる。

(22) 長老教中学（現在の長榮高級中学）は、一八八五年に創立されたミッシヨンスクールである。旗津半島の北端には、台湾基督長老教会としては最古の旗後教会が存在する。

(23) 前掲新井、三〇頁。

（国立歴史民俗博物館研究部）

（二〇一九年二月一三日受付、二〇一九年五月二八日審査終了）